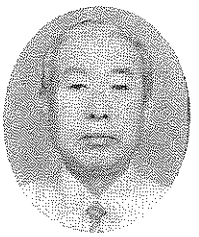
PREFACE

会長を拝命して



前　田　正　雄

今回はからずも清山教授の後を承けて，会長を拝命することになりました。もとよりその任にあらずというところでありますが，かくなる上は「やるしかない」という心境であります。役員諸氏を始め，会員の皆様のご援助，ご協力をお願い申し上げる次第であります。

20年程前，J. Gilman 編の "The Art and Science of Growing Crystals" (John Wiley & Sons, 1963) という本を大変興味を以て読んだことを思い出します。表面科学には多分に Art の部分があることに大きな感銘を受けたのでした。従来の物理学のテキストには，表面に関する記述はほとんどなかったと言ってよいでしょう。これは一つには重厚長大の産業構造の中で扱う素材では，表面の特性がバルクのそれに覆い隠されてしまっていたからで，現在のように，薄膜，微粒子，超 LSI といったものが主役を演ずることになれば，表面の特性を無視して科学技術を論ずることは不可能であります。

かつて Brattain が指摘したように，表面研究の主流は，真空管のカソードにおける電子放出の問題と，電極現象の研究であり，これらの研究では厳密な解析に堪えるデータを得ることは仲々困難であるということでした。これがセレン整流器の研究，半導体表面の研究の華々しい成果を経て，精密科学としての地歩を確立して参りました。しかし未だ Art 的色彩も多分に残っている魅力ある分野であります。

以上のような経過を踏まえて，会長として何をなすべきか，責務の重大さを感ずるのであります。前会長，前々会長の敷かれた路線を継承して行くことは勿論でありますが，広範な学問や技術に関連する分野の学会として先進諸学会の亜流に甘んずることなく，独自のレーゾンデートルを主張して行くための方策を模索して行くことになりましょう。まず第一歩は会員増強による財政基盤の確立と，現在以上に読み易く，かつ魅力ある会誌の刊行ということでありましょうか。会誌はまさしく学会の顔であります。

何分遠方に住んでおりまして，役員諸氏，とりわけ常務理事会の皆様には何かとご迷惑をお掛けすることが多いと思われますが，よろしくお願い致しまして，就任の言葉と致します。

（北海道大学工学部）